

漢法苞徳塾資料	No. 139
区分	基礎理論・津液
タイトル	津液について
著者	八木素萌
作成日	1990.12.02

◎体液成分概念の変化のデッサン

a. 内経・難経までの段階

内経には後代に明確化する「衛・気・榮・血」概念の萌芽が見られるが、この時期の基本的な概念は「気」と「血」または「衛気」「榮血」の概念であった。「気」はつまり「衛気」であり『陽』である、「血」はつまり「榮血」であり『陰』であるとされている。「気血概念の時代」と表現できよう。

b. 傷寒論・金元四家から明代初期の段階

張仲景は『傷寒雜病論』のちに『傷寒論』と『金匱要略』とに分けられたが、この『金匱要略』で「飲」「痰飲」の論を展開し、津液概念を基本的に確立した。このことは『傷寒論』において治療に際して「津液」の保持を何よりも重んじている点からも伺えるものとなっている。隋・唐代・宋代から金・元時代を経て明代初期までの段階、つまり、「温病」学の成立を準備していた時期は、「気・血・津液概念の時代」と表現できよう。この時期は『「経」学』の確立時期とも言われる。つまり『素問・靈枢』『難経』『傷寒論』『神農本草経』などを「経」として取り扱ったのである、『経方時代』とも呼ばれているが、極めて重要な医学的達成が行なわれた。それは、『傷寒論』に未展開の外感病（広義の傷寒病の内の、温病・熱病・湿熱〈湿温〉病・中風）や、要素的にしか提起しなかった厥陰病や、内傷病、瘀血の問題、不内外因との、臨床的な格闘の中からの要請に応じる為の理論的な営為として為されたのである。それは、先人の成果の緻密な検討と整理の上に立つ他にはないからであった。

鍼灸の分野でも新しい達成が行なわれているが、ここでも先人が提起して未展開であった部分や、要素的でしかなかった部分に成果が見られるのである。

c. 温病論の成立の段階

『時方段階』と呼ばれているが、「温病学」が次第に形成されて行き清代末まで懸けて完成されるのである。この時期にはまた瘀血論も完成している。この次期の比較的早い頃に、「衛・気・榮・血」の概念区分と辨証論が成立している。また「三焦」概念も明解に転回されている。

d. 『津液』概念は『内経』の記述を土台にしているが、病証論および辨証学とともに、以上のような経過の中で次第に精密なものになって行くのである。

◎『内経』における津液概念

- a. 「三焦ハ決流ノ官 水道コレヨリ出ズ 膀胱ハ州都ノ官 津液コレニ蔵サレ 気化スルトキハ能ク出ズルナリ」(素問・靈蘭秘典論第8)、

呉昆の註に「上焦治セザレバ 水高原ニ溢レ 中焦治セザレバ 水中瘀ニ停ス 下焦治セザレバ 水膀胱ニ蓄ス 故ニ三焦ノ氣治ストキハ 開決溝流ノ官ヲ為シ 水道ニ泛溢停蓄ノ患イ無シ」とあり、

唐宗海の『医経精義』には「腎中ノ陽蒸シテ膀胱ノ水ヲ動ズ 是レニ於イテ水中ノ氣上昇スレバ津液ト為リ 氣物ニ著スレバ仍リニ化シテ水ト為リ 氣皮毛ニ出レバ汗ト為リ 氣口鼻ニ出デテ涕ト為リ唾ト為リ 臟腑ノ内外ニ游溢スルモノハ則ワチ統ベテ津液ト名ウ」「人但ダ膀胱溺ヲ主サドルコトヲ知リテ 水膀胱ニ入ルコトヲ知ラズ 化氣シテ上行スレバ津液ト為リ 其ノ剰余スル所ヲ質セバ 乃ワチ下出シテ溺ト為ル」と述べている。

「人ニ精氣津液有リテ 四支九竅 五蔵十六部 三百六十五節 乃ワチ百病ヲ生ズ〜」(素問・調經論第62)、

「〜五臟液ヲ化シテ 心ハ汗ト為シ 肺ハ涕ト為シ 肝ハ泪ト為シ 脾ハ涎ト為シ 腎ハ唾ト為ス〜」(素問・宣明五氣第23)、

「〜人ノ血氣精神ハ 生ヲ奉ジテ性命ニ周ネキ所以ノ者ナリ〜」(靈樞・本蔵第47)、

「〜人ノ有ル所ノ者ハ 血ト氣ノミ〜」(素問・調經論第62)、

「〜榮衛ハ精氣ナリ 血ハ神氣ナリ 故ニ血ハ之レ氣ト 名ヲ異ニシテ類ヲ同ジクスルモノナリ〜」(靈樞・營衛生会第18)、

「〜両神相イニ搏マリ 合シテ形ト成リ 常ニ身ニ先ンジテ生ズ 是レヲ精ト謂ウ 何レヲカ氣ト謂ウヤ 岐伯曰ク 上焦開發シテ 五穀ノ味ヲ宣ベ 膚ヲ薫ジ 身ニ充チ毛ヲ沢ホシテ 霧露ノ漑ノ若シ 是レヲ氣ト謂ウ 何レヲカ津ト謂ウヤ 岐伯曰ク 腠理發泄シ 汗出デテ 溱々タリ 是レヲ津ト謂ウ 何レヲカ液ト謂ウヤ 岐伯曰ク 穀入り氣満チテ 淖沢ト骨ニ注グ 骨属屈伸シ 泄沢シテ 脳髓ヲ補益シ 皮膚ヲ潤沢ス 是レヲ液ト謂ウ 何レヲカ血ト謂ウヤ 岐伯曰ク 中焦氣ヲ受ケテ汁ヲ取り 変化シテ赤キモノ 是レヲ血ト謂ウ 何レヲカ脈ト謂ウヤ 岐伯曰ク 榮氣ヲ壅遏シテ 避クル所無カラシムル 是レヲ脈ト謂ウ〜」(靈樞・決氣第30)、

「〜何レヲカ徳・氣・生・精・神・魂・魄・心・意・志・思・智・慮ト謂ウヤ 請イテ其ノ故ヲ問ワン 岐伯答ヘテ曰ク 天ノ我ニ在ル者ハ徳ナリ 地ノ我ニ在ル者ハ氣ナリ 徳流レ氣薄リテ生ズル者ナリ 故ニ 生ノ来タルモノヲ之レヲ精ト謂ウ 両精相イニ搏マル之レヲ神ト謂ウ 神ニ随イテ往来スルモノ之レヲ魂ト謂ウ 精ニ并ンデ出入スル者之レヲ魄ト謂ウ 任物スル所以ノ者之レヲ心ト謂ウ 心ニ憶ウ所有リ之レヲ意ト謂ウ 意ノ存スル所之レヲ志ト謂ウ 志ニ因リテ変存ス之レヲ思ト謂ウ 思ニ因リテ遠慕ス之レヲ慮ト謂ウ 慮ニ因リテ物ニ処ス之レヲ智ト謂ウ〜」(靈樞・本神第8)、

「〜五蔵ハ 精神魂魄ヲ蔵スル所以ノ者ナリ 六府ハ水穀ヲ受ケテ化物ヲ行グラス所以ノ者ナ

リ 其ノ氣五蔵ノ内リ 而シテ肢節ニ外絡ス 其ノ浮氣ノ經ヲ循ラザル者ヲ 衛氣ト為シ 其ノ精氣ノ經ヲ行ル者ヲ 榮氣ト為ス 陰陽相イニ随イテ 外内相イニ貫イテ 環ノ端無キガ如ク 亭々淳々乎タリ 孰ソゾ能ク窮メンヤ〜」(靈樞・衛氣第 52)、

「〜榮氣ハ 其ノ津液ヲ泌シテ 之レヲ脈ニ注ギ 化シテ以ッテ血ト為シ 以ッテ四末ヲ榮シ 内ニハ五蔵六府ニ注ギ 以ッテ刻數ニ応ズナリ〜」(靈樞・邪客第 71)、

「〜中焦ハ胃中ニ亦并シテ 上焦ノ后ニ出ズ 此レ氣ニ受クル所ハ 糟粕ヲ泌シ 津液ヲ蒸シ 其ノ精微ヲ化シテ 上ニ肺脈ニ注ギ 乃ハチ化シテ血ト為シ 以ッテ身ヲ奉生ス 此レヨリ貴キモノ莫シ 故ニ独リ經隧ニ行グルコトヲ得 命ズケテ榮氣ト曰ウ〜」(靈樞・營衛生會第 18)、

「〜榮ハ 水穀ノ精氣ナリ 五蔵ヲ和調シ 六府ヲ洒陳シ 乃ハチ能ク脈ニ入ルナリ 故ニ脈ニ循リテ上下シ 五蔵ヲ貫キ 六府ニ絡ウナリ〜」(素問・痺論第 43)、

「〜飲胃ニ入り 精氣ヲ游溢シ 脾ヨリ上輸ス 脾氣精ヲ散ジ 上ニ肺ニ歸シ 水道ヲ通調シ 膀胱ニ下輸ス 水精ヲ四布シ 五經ニ并ビ行グラシ 四時五蔵陰陽ヲ合ス 揆度ハ以ッテ常ヲ為スナリ〜」(素問・經脈別論第 21)、

「〜津液相イニ成レバ 神乃ワチ自ラ生ズ」(素問・六節藏象論第 9)、

「〜五穀ノ津液和合シテ膏ヲ為ス者ハ 内ニ骨空ニ滲入シ 腦髓ヲ補益シテ 陰股ニ下流ス〜」(靈樞・五癰津液別第 36)、

等など『津液』に関連するものを抜き出してみた。これらを整理して『津液』の観念をスッキリとしたものにするのは、冒頭に近い所に引用した唐宗海の『医経精義』に記述であろう。唐宗海は『1851年〜1908年』の人で『中西匯通医経精義』(この内の『血証論』は有名)があり、秦伯未や錢樂天などと並んで現代中医学の基礎を形成した人である。水穀・精・気・血・津液の相互関係を理解する必要がある。

「〜陽ハ氣ト為シ 陰ハ味ト為ス 味ハ形ニ歸シ 形ハ氣ニ歸ス 氣ハ精ニ歸シ 精ハ化ニ歸ス 精ハ氣ニ食ワレ 形ハ味ニ食ワレ 化シテ精ヲ生ジ 氣ハ形ヲ生ズ 味ハ形ヲ傷リ 氣ハ精ヲ傷ル 精ハ化シテ氣ト為リ 氣ハ味ヲ傷ル〜」(素問・陰陽応象大論第 5) は相互関係論を良く描出している。

- b. 以上から理解できることは、『津液』の異常とは『水分代謝』の異常に他ならないと言う事であるが、「水穀」つまり飲食の不適切・「気」つまり機能や呼吸の異常・「血」つまりは血液の成分や機能的側面の異常・「精」つまりは「腎精」の毀損などと、深刻に関連しているものである事である。病証的には五液(心の汗・肝の泪・脾の涎・肺の涕・腎の唾)の変動となり、異常な発汗や浮腫や咳嗽や痰飲や飲症や閉尿や尿意頻数や多尿や溏便などその他となる。
- c. これらの『津液』の異常に由来する病証は、外因(風・暑・熱・湿・飲食勞倦・燥・寒)にも、内因(七情=喜・怒・憂・思・悲・驚・恐など)にも、不内外因(虫獸の咬刺傷・熱傷・骨折捻挫打撲等の秩撲傷・食中毒等の飲食傷・房室の勞傷など)においても、これらに関連する全ての病証に涉っているものである。

◎ 津液の機能に関連の深い臓腑経絡

◎ 『内経』の幾つかの配穴例ほか

a. 「～風外ヨリ入レバ 人ヲシテ振寒セシメ 汗出デ頭痛シ 身重ク悪寒ス 治ハ風府ニ在リ 其ノ陰陽ヲ調ウ 不足スルトキハ補シ 有余ナルトキハ瀉ス～」(素問・骨空論第 60)、

「～振寒シテ洒々トシ 鼓頤シ 汗出デズ 腹脹シ煩惋スルモノハ 手太陰ニ取ル～」(靈樞・寒熱病第 21)、

「邪脾胃ニ在ルトキハ 病肌肉痛ム 陽氣有余シ 陰氣不足スルトキハ 熱中シ善ク飢ユ 陽氣不足シ 陰氣有余ナルトキハ 寒中シ腸鳴シ腹痛ス 陰陽俱ニ有余シ 若シクハ俱ニ不足スレバ 寒有リ熱有ルナリ 皆三里ニ調ウ～」(靈樞・五邪第 20)、

「～飲食下ラズ 膈塞イデ通ゼザルハ 邪胃脘ニ在リ 上脘ニ在ルトキハ刺抑シテ之レヲ下ス 下脘ニ在ルトキハ散ジテ之レヲ去ル～」(靈樞・四時氣第 19)、

「～腎病ハ腹大ニ脛腫レ 喘咳シテ身重ク 寢汗出デテ風ヲ憎ム 虚スルトキハ胸中痛ミ 大腹小腹痛ミ、清厥シテ意樂シマズ 其ノ経少陰太陽ノ血ヲ取ル者ナリ～」(素問・蔵氣法時論第 22)、

「～氣胸中ニ満チテ喘息スルモノハ 足太陰大指ノ端 爪甲ヲ去ル薤葉ノ如キニ取ル 寒ナルトキハ之レヲ留メ 熱ナルトキハ之レヲ疾ニス 氣下レバ止ム～」(靈樞・熱病第 23)、

「腹中常鳴シ 氣上ニ胸ヲ衝キ 喘シテ久立スル能ワザルハ 邪大腸ニ在リ 盲ノ原 巨虚上廉 三里ヲ刺セ～」(靈樞・四時氣第 19)、

「～黄帝曰ク 膚脹鼓脹ハ刺スベキカ 岐伯曰ク 先ニソノ脹ノ血絡ヲ瀉シテ 后ニ其ノ経ヲ調ウ 刺シテ其ノ血絡ヲ去ルナリ～」(靈樞・水脹第 57)、

「～脹は三陽に取れ～」(靈樞・九鍼十二原第 1)、

「～衛氣脈ニ并シ分ニ循リテ膚脹ト為スハ 三里ニシテ瀉ス 近キ者ハ一下シ 遠キモノハ三下ス 虚実ヲ問ウコト無カレ 工ハ疾瀉ニ在リ～」(靈樞・脹論第 35)、

「～帝曰ク 水愈五十七処ハ 是レ何レヲ主サドルヤ 岐伯曰ク 腎愈五十七穴ハ 積陰ノ聚マル所ナリ 水ノ出入ニ従ウ所ナリ 尻上ノ五行ノ五ヲ行ク者ハ 此レ腎愈ナリ 故ニ水下ニ病メバ 附腫シ大腹ヲ為シ 上ナレバ喘呼ヲ為シテ 臥スコト得ザルモノハ 標本俱ニ病ムナリ 故ニ肺ハ喘呼ヲ為シ 腎ハ水腫ヲ為ス 肺ハ逆シテ臥スルヲ得ザルヲ為シ 分レテ相輸ヲ為ス 俱ニ受クルハ水氣ノ留マル所ナリ 伏菟上各々ニ行ノ行五ハ 是レ腎ノ街ナリ 三陰ノ脚ニ交結スル所ナリ 踝上ノ各一行ノ行六ハ 此レ腎脈ノ下行ナリ 名ンデ太衝ト曰ウ 凡ソ五十七穴ハ 皆蔵ノ陰絡 水ノ客スル所ナリ～」(素問・水熱穴論第 61)、

「～小腹痛腫シ 小便ヲ得ザルハ 邪三焦ニ在リテ約ス 之レヲ太陽ノ大絡 其ノ絡脈ト厥陰ノ小絡ノ結ボレテ血スルモノヲ視テ 腫上及ビ胃脘ニ取ル 三里ニ取ル～」(靈樞・四時氣第 19)、

「～内閉シテ溲スルヲ得ザルハ 足少陰ヲ刺シ 太陽ト骹上ニ長鍼ヲ以ッテス～」(靈樞・癲狂第 22)、

「～癰ハ 之レヲ陰驕及ビ三毛ノ上及ビ血絡ニ取りテ血ヲ出ダス～」(靈樞・熱病第 23)、

「～腸中便ナラズハ 三里ニ取ル 盛シナレバ之レヲ瀉シ 虚スレバ之レヲ補ウ～」(靈樞・四時氣第 19)、

「～腹滿シテ食化セズ 腹響々然トシテ 大便スル能ワザルハ 足太陰ニ取ル～」(靈樞・雜病第 26)

その他実に多くの記述が見られる。素問・藏氣法時論第 5、靈樞・五邪第 20 には五臓病の刺法が記述され、靈樞・邪氣藏府病形第 4 には六府の病証と治療が記述され、心痛については靈樞・雜病第 26 と厥病第 24 と素問・氣穴論第 58 に記述されている。

張介賓は「～水俞五十七穴は 皆藏の陰絡 陰氣の行ぐる所と為す 故に治水は当さに察して之れを取れ～」と記述している。

任応秋は『黄帝内経類析』に「大凡水腫之疾 当以利水為主 腫至心下 取水分 中脘、少腹水腫取関元為先 或佐以水道 氣海、他如陰陵泉 足三里 復溜 委陽 中極 腎俞亦常選用」と述べている。

間中博士は『鍼灸臨床医典』の「腹水」の項に「陽水～～曲池・足三里・足臨泣・章門・列缺・合谷・風門・人中」「陰水～公孫・陰陵泉・水分・腎俞・陰谷・氣海・復溜・命門」と記述し、「尿失禁」の項に「百会・命門・中脘・関元に灸する」と記述している、また、「癰閉」の項には「癰症～膀胱俞・小腸俞・復溜・湧泉・曲泉」「閉症～三焦俞・陰陵泉・三陰交・関元」と記述する。

「風水」＝腎風、「涌水」＝肺腎虚寒、「石水」＝陽虚陰盛水停、「脹症」「飲症」などの記述が『靈樞』では「脹論第 35」「本神第 8」「邪氣藏府病形第 4」「水脹第 57」「五癰津液別第 36」「論疾診尺第 74」、『素問』では「水熱穴第 61」「生氣通天論第 3」「陰陽別論第 7」「脈解第 49」「脈要精微論第 17」「宣明五氣第 23」「平人氣象論第 18」「奇病論第 47」「評熱病論第 33」「大奇論第 48」「氣厥論第 37」「湯液醪醴論第 14」「通評虚実論第 28」など等から学ぶ必要がある。

◎水熱穴について

7月の講義『水腫の理解と治療』で紹介しているので参照する事

◎泄瀉について

- a. 「～脾病者 身重善肌肉痿 足不収行 善瘕、脚下痛 虚則腹滿腸鳴 飧泄食不化 取其經太陰陽明少陰血者～」(素問・藏氣法時論第 22)

「～飧泄 補三陰之上 補陰陵泉 皆久留之 熱行乃止～」(靈樞・四時氣第 19)

「～飧泄取三陰～」(靈樞・九鍼十二原第 1)

- b. 「～胃泄者 飲食不化 色黄 脾泄者 腹脹満 泄注 食即嘔吐逆 大腸泄者食已窘迫 大便色白 腸鳴切痛 小腸泄者 溲而便膿血 少腹痛 大瘕泄者 裏急后重 数至圜而不能便 茎中痛～」(難経・五十七難)
- c. 配穴例は「鍼灸心悟」「甲乙経兪穴重輯」「鍼灸歌訣」などから口述